
彼女は「終わりの始まり」

shibahuly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女は「終わりの始まり」

【Nコード】

N2858BA

【作者名】

shibahuly

【あらすじ】

普通な日常を望む彼女は神崎愛梨。一年間は無事に平穏に暮らせたものの、高校二年生になると同時に異世界に呼ばれてしまった。それは愛梨にとって日常の終わりであり、異世界での「終わりの始まり」であった。―― 処女作ですのでよろしく願います。拙い文章ですが、読んでいただけるとありがたいです。必ず1週間に一話は投稿するつもりです。

始まりは女子高生

…私は普通が大好きだ。

「人生はドラマチックでなけりゃつまらねえ」

というがそんなことはない。

そんなことを言うのは人生が普通な奴だけの特権で、私のような人からすればうらやましい限りである。

ほんと贅沢な話だと思う。

まあ、ドラマチックな人生なんて基本ありえない、とまではいかなくともほとんどないだろう。

私にとってドラマチックな人生なんて普通だ。

非日常と結びつけて考えて欲しくないね。

だけでも世の中の人間にはドラマチックな人生〃非日常が成り立っていると思うっているようで傲慢だとおもっただよね。まったく、呆れてしまう。

例えば、

イケメン男「君みたいな子、初めてだよ」

地味女「わ…私なんか……あなたなんかにはも…もったいないよ！」

イケメン男「ほら、眼鏡を外せばこんなに可愛いのに…。」

地味女「か…可愛い…！？」

イケメン男「もう一生離さない。僕には君しかいないんだ！君が好きなんだ！」

地味女「…！嬉しい…！私もあなたが大好きです！」

そして2人は永遠を誓うのだった。

――みたいな話や、

地味男「雨に濡れちゃったね…。うち、これから近いから来る？」

美女「え！？」

地味男「シャワー浴びた方がいいと思うんだ」

美女「じゃあ、お言葉に甘えて…」

↓地味男宅にて↓

美女「きゃ！何見てんのよぉー！！」

地味男「ご…ごめん！タオルと着替えを持ってきたから置いておこうと思っただけ…！」

美女「ってあんた誰？」

地味男「誰って僕だけ…。あ、先にふ…風呂入ってゴメンね…？」

美女「嘘……！？前髪上げるとイケメンじゃん、ヤバイ…（惚れちゃった！）」

「ーみたいな誰でも夢見るロマンチックでドラマチックな、非日常的な感じがあふれる簡略化した話がある。

非日常じゃないか？いやいやそんなことはない。ロマンチックでもドラマチックでも私からすれば普通だよ。全然普通だね！

ただ私もさすがにこういうのはちよつと遠慮かな…。よくある恋愛ものだけどなんていうか、なんというかうまく言えないな…。

キラキラした人って言うのはちよつと抵抗を覚えちゃうんだよね。

…なんで、とか聞かないでね？わかんないから。

私としては友達とかが話すような一般的な普通の恋愛がいいの。普通の。

（たぶん無理だけど…）

漫画や小説にしたとしても、別段面白いところもなけりゃ、もはや脇役のカップルみたいな扱いを受けるようなもので、世間からすれば「大したことない」ような恋がいい。

中学時代にこの話を何度も友達にしたけど決まって「変な子」って私は言われる。

そして、つまらない恋をしたい訳ではない、と誤解を解かねばならなかったのだ。

…言っておくけど、「変な子」と言われるだけの自覚はあるし、

感覚がずれているのも分かる。

だって、住んでる世界が違っただもの。仕方ないじゃない。

…話しがそれてしまったね。とりあえず、私が言いたいことはドラマチックな人生 非日常であり、ドラマチックな人生「普通だよ！ってこと。

ただでさえ私は非日常的な生活なのだ。どう非日常的かといわれなくても秘密なのけど……。

伏線ってやつなのかな？（言ってるハズい…）

女の子には秘密が1個や2個ある方が輝くというものの、こんな秘密ならいらない。

輝かない方が格段とマシだ。

…ああ、なんて私は輝いているのだろう（涙）

惚れ惚れするよ…

だから普通の生活は昔からのこんな私の願いなのだ。

…。

……。

一体私は何に話しかけているのだろう…。

独り言とか…。

今日はいいい天気だ、と私は思った。

今日“も” じゃないのは今日までの春休みの間、ずっと慌ただしかったからだ。

見上げれば雲一つ無い空を見ることが出来る。

その青は今まで以上に澄み渡った色をしていて、すずめの鳴き声もオーケストラのようだ、と私は思いながら、いつも（なんて素晴らしいフレーズ！）通る街並みを歩く。

今日は街並みも綺麗なように私は感じたのだった。それもそのは

ずだ。

何故なら高校生になって1年が経ち、今日から高校2年生になるのだ。

ふと、去年を思い返す。(けっこうよく思い出すのだが)

高校1年生の間は、ありふれた日常(仮)を1年間守ることが出来た。

自分でいうのもなんだけど奇跡だと思っていて、中学時代は秘密がバレてしまったがために、転校を何回かしなければならなかったこともあった。

毎回転校するたびに悲しくなっていて、新しい日常(仮)に出会えるたびに喜んだものだ。

中には秘密を知っても友達でいよう！転校する必要なんか無いって！と言ってくれるクラスの子はいたけども、残念ながらサヨナラするしかなかったのだ。

私にとって、この1年は何ものにも代え難いもので、私の宝物なのだ。

とか、思いながら上機嫌にいつも(やはり素晴らしいフレーズ！)通う学校前の坂を登っていると、見知った顔に出会ったのだ。

「愛^{あい}ちゃん、おはよう〜！」

と言われ、

「おはよう、綾^{あやね}音」

と私は返す。

「…綾」

綾音が言う。いつものやりとりだ、とわかり、

「うん？」

「綾って呼んでいいんだよ？」

「綾音って呼ぶ方が可愛いと思うよ？」

「またまた、恥ずかしがり屋なんだから」

「そんなつもりは無いのだけれど」

その2人の光景に、周囲の生徒はどよめく。

どよめくというより喜び叫ぶ、といった感じだ。「くつ、新学期初日の朝からをこの光景をながめることが出来るとは…！！グハッ…」「神立コンビご馳走様です…！」「絵になる…」などの声が聞こえる。

そんな風に周りから言われているなど全く知らない2人は学校でもトップの美人と評される。

愛ちゃん、と呼ばれた方は「神崎 愛梨（かんざき あいり）」という名前で、平均的な身長にふわりとした腰まである綺麗な薄ピンク色の長い髪を持つ。

でるところはでているわけではないが、小さくもなく絶妙なバランスであり、何より肌のハリ、弾力、みずみずしさ、艶やかさ、すべてが完成されているといっても過言ではなく、それらから考える美しさはたまらないであろう。女から見ても感動するらしい。

そして、普段は態度や言葉遣いなどから比較的クールなように見えるけども、時折見せる笑顔やへましてしまう様に女生徒からも異様に人気が高い。

ようするに見る人すべて男も女も魅了するプロポーションと性格の持ち主なのだ。

一方綾音という生徒は本名を「橘 綾音（たちばな あやね）」といい、愛梨より背が小さく、サラサラ感あふれる金髪ツインテールの持ち主だ。

金髪ツインテにしては、無造作というか作られたかのようなハネ感を持ち、誰もが奇跡だと思ってしまっただろう。実質、愛梨から見ても神々しさを感じるほどなのだ。

ふわりとした唇、整えられた左右対称の瞳、こぶりな胸、スラッとした足に、そして、男なら皆守りたくなるような可憐さを兼ね備えている。

女子ならば妹を持ったような錯覚にとらわれてしまっただろう。

そんな二人は誰が言ったのか知らないが、「かんざき」の「かん」と、「たちばな」の「たち」で神立コンビと呼ばれている。かんたち

きつと、この二人を見たときに受けた衝撃、びびつと雷鳴が轟いたことから付けられたんじゃないか、と愛梨は考えている。

綾音は上手いこと言ったもんだ、と笑っていたからムカツとして頭を叩いた。

ファン曰く、綾音のやんちゃなことと愛梨の面倒見の良さのコンビも含まれているのだとか。

神立コンビの「だち」……綾音が言う。

「愛梨は……」

「さて、挨拶はしたしさつさと学校に行きましようか？」

私は満面の笑みという営業スマイルで返事をする。

「遮られた！？」

と、綾音が声をあげる。

その顔は実に面白くて、可愛い。だからついつい私はからかってしまふのだった。

こういうところが女生徒に妹みたいな印象をあたえ、男子生徒は惚れてしまふのだろっ、そんなことを思いつつ言っのだった。

「気のせいじゃない？」

「嘘！」

「気のせいだつてば」

「絶対嘘だつて…。久しぶりに会うつていつのに私の扱いが少しぞんざいじゃない？」

「まさか！私の可愛い綾音にそんなことしないわ！」

「おもいつきりされてんですけど…」

「少し自意識過剰よ？」

「これ、新学期そうそうにする会話じゃないって……！」

「……」

……確かに、と思ってしまった。

確かにうなずける話であるので返事に困ってしまい、必然的にこ
ういった返事になってしまったのである。

「…同じクラスだといいね？」

「話題変えないでよー！」

「さつきからこの話題だけど？」

「……………嘘つき」

さすがにちよつと苛めすぎたか、と感じてきた。（綾音の目が潤
んできたから。）

以外と涙腺が弱いのである。

「ごめん、ごめん。つい、ね？ただ私は恥ずかしがり屋じゃないし、
私が綾音って呼びたいの？本当よ？」

愛梨の本音。

「…分かったよ」

「ありがとう。じゃ行きましょ？遅刻しちゃうよ？」

そう返事をして、綾音の頭を撫でて学校へ急ぐ。

「始業式に遅刻しちゃマズいもんね！」

綾音は一瞬でずいぶんご機嫌になって、愛梨と一緒に急ぐのだった。

「一緒のクラスだ！」

下駄箱前の廊下にクラス分けの紙が貼っており、そこには「2組9番 神崎 愛梨」と書いてある。

さらに下を見ていくと「2組20番 橘 綾音」と書かれている。

「やったね！」

「私と愛ちゃんはきっと運命の糸で繋がっているに違いない！」

真顔で綾音は言う。…運命とか言ってて恥ずかしくない？と愛梨は心でつつこみをいれる。

実は愛梨はそんなことを人に言える立場ではないのだが、自分のことを棚に上げているようだ。

「言い過ぎだって」

「世界には何十億という人がいるんだよ？その中でこうして同じ学校に入って、連続で同じクラスになるなんて「運命」しか有り得ないよー！」

「スケールがデカすぎる！一瞬、本当かも、とか考えたじゃない！」
こういうときの綾音は手強い。勝てる気がしない、と愛梨はいつも苦戦するのだった。

「思考を放棄しては駄目よ。人は考える生物なのだから」

気がつく綾音は目の前で私の顔を見上げてくる。

「だからスケールがデカすぎるって！」

「よく考えて？そうすれば真理は見えてくる……」

綾音の顔が近づいてくる。近い、近いよ……！と思えども言葉にしないというより出来ない。

何故だか言うことが出来なくて、不思議な力がそういう風に働いてるとしか愛梨には思えなくなるのだった。

周りの女子が騒がしい。だが愛梨は言う。しかし、綾音に遮られる。

「よく考えるって……」

「余計な事は考えないの。考えるべきことは何？真理を視なさい？」

「真……理……」

「そう、真理」

「……………」

「しっかり考えて」

「……………アホらしいわ」

「きゃん！」

綾音の頭にチョップして、クルツと背を向けて言う。

「さつさと教室に行くべきね」

我に戻った愛梨は有無を言わず綾音を置いて教室に向かう。

…危なかった、あともうちよつとで百合の華が咲くところだった、と愛梨は思いながら。

…周りを見ると多くの生徒が満面の笑みをして倒れている、気がした。

「待ってえー！」

…。

愛梨は聞かなかったことにした。

始まりは女子高生（後書き）

はじめまして、shibahulyです。

処女作なのでよろしくお願いします！

愛梨と綾音がヤバい雰囲気ですが、

愛梨と綾音がGLになるようにはしませんのでお願いします！

2 赴く先は死地

「今日はこれから用事があったの忘れてた！一緒に帰れない…」

愛梨に用事など全くなかったのだが、残念なことに学校へ来てから用事が出来てしまった。

本来ならこの後はお喋りしながら、寄り道しながら帰るはずであった。

一日を自由なことに費やすつもりでいたはずであった。

春休みの疲れを癒すつもりの計画だった。

「用事なら仕方ないね。イツメン（いつものメンバー）と帰らせてもらうわ…」

綾音は肩を落として言った。目が潤むほど愛梨と帰ることが出来ないのがショックなようだ。

綾音の愛梨への依存度を再確認させられる反応だった。

「本当にごめん！」

私は顔の前で手を合わせて言った。

なぜなら愛梨は綾音と約束をしていた。

始業式のために体育館へ行く途中、今日をどうするか話し合い、とりあえず一緒に帰ることを約束したのだった。

「いって…明日一緒に帰ってくれるんならそれでいいから！」

「絶対に約束する！ありがとう、綾。じゃあね」

綾音が喜ぶことを言っただけで愛梨。

「……！！い……今なんて……！？……あ、ちょっと！」

さて、もういいか、など考えて今日2度目となるシカトを実行し、机の横にかかるバックを取って教室を出て行く。

廊下に出ると帰ろうとする生徒で一杯だ。

春休みをどう過ごしていたか聞くものや、新しいクラスに喜ぶものの、部活動に燃えるもの、様々な生徒がいる。

それもそのはず今日は始業式だから学校が終わるのがもの凄く早いのだ。

今もまだだいたい10時くらいだ。

加えて友達に話すことがたくさんあるのだから、こんな雰囲気になるのもあたりまえなのだろう、と愛梨は考える。

周りの生徒にとつて廊下にいる美女、愛梨にとつての春休みはそれはそれは非道いものだったので話したいことなんか微塵もない。

そのことを知らない綾音はもちろんクラスの女子、男子全員から春休みをどうしていたか愛梨は質問責めを受けていたのだが、若干キレたのか机を叩き「言いたくないの。それ以上聞かないでね」と笑顔で言っただけで黙らせたのだった。

その時、その笑顔に威圧されたクラスのみんなは愛梨を怒らせるとマズい、と思ったのだった。

ただ、それだけではないようで、廊下に愛梨が出た瞬間、空気が変わる。

愛梨も自分で知るようにこの容姿なのだ、視線が集まるのも当然であるだろう。

なんて言っただけで学校のアイドルが歩いているのだから、男も女も目が釘付けになるのだ。

女から見ても見惚れてしまう程の美しさを愛梨は持っているのだ

からなおさらだ。

愛梨は周りを見渡すわけではないが前を向きつつ周囲を確認すると、私以外は時間が止まっているようだ、と思った。

うっかり触ってしまえば、石のように固まって倒れてしまうのではないか、と思ってしまうほどらしい。

……ちゃんと生きてるんだよね？と思う愛梨。

扉を開く。

油が刺さっていないためにギィ、と音がする。

「これは…何の因果だよ…」

苦い顔をして思わずそうつぶやいた。

今愛梨がいるのは学校の裏手にある使われなくなった旧校舎——
—といってもそこまでの古さは感じさせず、今は部室棟として使われている——の旧音楽室にいる。

ここは防音設備がないことと夏場は物凄く熱く（暑くじゃなくて熱く）、冬場は何故か外より寒くなるためにどこも使っていない。

別名「呪いの音楽室」とも呼ばれているほどだ。

生憎あいにく今日は始業式、つまり4月ということもありそこまで寒くは

なかった。

愛梨は今朝学校へ来たときに旧校舎から感じた漂う不穏な気配が気になって、学校が終わってからすぐに来たのだった。

すると音楽室の部屋の真ん中には何かが描かれ光っている。

見るとそれは漫画でもよくある魔法陣らしきもの、円の中に五芒星の描かれたやつだ。

「確実に私を呼んで……で、これは行かないとマズいパターンか」

と言って一歩近づいてみる。

「光が増してる……。やだなあ……なんで私なのよ！って言うてもしやあないのか……これも仕事だから最悪なのよね……」

ここ2年は無かったのになあ……と、嫌そうな顔をしてそう思いながら、愛梨は手を真上に挙げる。

すると、愛梨が4人現れる。

厳密には少し雰囲気や容姿が違うので愛梨亜種といったところが妥当だろう。

「本体は呼ばれているわ。あっちに行っている間、こっちは任せたわ」

本体は言った。

「なんて可哀想な私」

濃い藍色の髪が言う。愛梨の髪のサイドを白のリボンで纏め、

真ん中で一つに纏めているのだが、白のリボンで長く纏めている。

「…右に同じく」

赤い眼鏡を掛けた深緑色の髪私の言葉。

長い愛梨の髪をサイドで一本に纏めている。

「私よ、お前の分まで日常を楽しんでやるよ」

赤い色、というよりむしろ紅の色をした髪私が言う。
ポニーテールをしている。

「代わりに私が行ってもよくってよ？」

綾音には負けるが金髪の私。

お団子ヘアで、一本の桜を表すような簪が刺さっている。

「…分身にそんなこと言われるなんて、私も墜ちたものね。でも、本体をなめないでね？」

…どうやらまだ消えたくないようだ。本体の放った威圧にビクツ
と反応する分身^{わたしたち}ども。

「あと懸念材料は綾音だけ、か。…綾音にはなんて言おう…」

綾音と明日一緒に帰る約束を忘れる訳には行かなかったが、こればかりはどうしようもない。

そのことについて頭を悩ませながら、愛梨は魔法陣思しきものの中へと踏み込んでいくのだった。

「世界は迷った挙げ句の果てに決断を下す。」

「神を見放したのだ。」

「人を見放したのだ。」

「しかし、世界は彼等に最後のチャンスを与えるのだった。」

「神も人もそうとも知らずに――」

「世界自身でさえどうなるかは何も知らない――」

「私がよくある異世界もののように異世界に跳ばされて転ぶと思うなよ！」

なめんな！と頭上に叫んだ。

ここはどうやら異世界のようで、まず空がよどんでいる。

森は混沌として周りに存在し、辺り一面に見知らぬ生物もとい俗に魔物と呼ばれそうなものがある。

雑魚から強そうな魔物？まで種類豊富だ。ザッと200はくだらないかも、と愛梨思った。

…全員こちらを見ている気がするのはいのせいだ、と考えたい。

「ちょ…ちょっと、このパターンは何！？普通最初って始まりの街的なとこの近くの森とかじゃないの！？目の前に邪悪な感じの城が建ってんですけど！？まさかLv1で最終ステージ！？」

普段ならば絶対しないであろう反応。このあと愛梨はこう振り返ったのだった。

「キャラ崩れしすぎだった…。なんて恥ずかしい…。あいつ等や綾音には決して見せらんない…」

…きつと綾音が見ていたら萌え、分身が見たらドン引きなのだろうと考えた。

そして、魔物どもが襲ってくる。

「なんて手厚い歓迎！？」

跳ぶことで魔物達の突撃をかわし、そのまま集団の外に着地する。

「…ふう。私って相変わらずモテモテね。魔物みたいなものにまで好かれちゃうなんて」

跳んでいる間に冷静になった、キャラを元に戻した愛梨は余裕を持って皮肉を言う。

相手が聞いているのかどうかは知らないけど。端から見ると独り言だ。

魔物どもの攻撃が当たらないよう間を空けてかわす。

かわすと闘牛のような角の付いた生物が突進して来るのでそれを跳んでかわす。

愛梨が避け続けると、一向に攻撃が当たらないことに段々と魔物どもが苛立っていることがわかる。

さて、どうしたものか、と考える。

愛梨なら魔物アイツらどもをぶっ飛ばすことも出来るし、逃げ切ることも可能だけでもぶっ飛ばすとなると実力を出さなければならぬし、逃げ切るにも実力を出さねばならない。

相手が雑魚だけでなく強そうなのもいるからたちが悪く、きつとコイツらは私の実力を量るために用意されたものに違いないと考えつく。

この世界に飛ばされたばっかで力を見せるのも癪だし、普通に逃げて臆病者と思われるのも嫌なのだろう。

愛梨は集団の中に突っ込みながら言い放つ。その目はとてつもなく鋭い目だった。

「精々死なないようにね？」

まずは雑魚そうなゴブリンもどきを殴る。ゴブリンもどきは石に当たってふっ飛ばせはしなかったが、倒すことは出来た。

すると愛梨はすぐにしゃがみ込むと、頭上にオークもどきの拳が飛んできた。

後ろに目が付いてんじゃないか、という動きで避ける。

そして、しゃがんだ際に放った足払いでオークを転ばし、その足を持って投げ放つ。

「うらああああ！」

オークはだいたい愛梨の2倍くらいの大きさがあり、普通は投げるなど出来るはずも無いのだが実際投げられていて、飛ばされたオークに雑魚の何体かが押しつぶされた。

その隙を見て、横からやってきた鋭いくちばしを持ったコンドルもどきがオークを投げた愛梨を狙うが当たらず、首を掴まれそのくちばしは愛梨ではなくオークの心臓を突き刺していた。

深く突き刺さった為コンドルは抜け出すことも出来ないし、既に絶命していた。

それを見ていた他のコンドルが複数で四方八方からやってくる。たくさんの敵なら相手も手も足も出ないのではないか、と考えたかのような動きで物量作戦に出たのだ。

しかし、攻撃は当たらない。そのくちばしが当たるのは他の魔物だ。

コンドルは驚いていたが、愛梨はただコンドルをすべて逸らし、四方八方へコンドルを放っただけだった。

全てをヒットさせ、4つの残骸が完成される。

愛梨の鋭い眼光が新たな敵を睨む。

二足歩行の剣と盾を持ったワニ、リザードマンのような生物が愛梨に向かって剣を振りかざしてくる。

それを跳んでかわし、近くのゴブリンを踏み倒して着地する。

横から仲間のゴブリンが一斉に襲いかかってくるも、愛梨の目の前にいる1体の頭に手を置いて跳ぶことで難なく避けてしまう。

目の前から敵がいなくなったのに驚き、止まろうとしようとしても既に遅く、ゴブリン達は相打ちになったのだった。

愛梨は相打ちになったゴブリンどもには目もくれず、跳びながらリザードマンを観察すると、固い鱗を持っているようなので簡単に

は倒せなさそうだと判断する。

だからと言って愛梨は別の敵に目標を変えない。

手にゴブリンを掴んだまま、リザードマンへ走りだす。

走るのを妨害しようとコンドルが複数突撃して来るが、もう一方の手と足を使ってあしらいつつも走る。

その様子を見たリザードマンが再び剣を振りかざそうとして来るが、手の中のゴブリンをリザードマンの手に投げつけて撃退する。その衝撃でリザードマンは痛みに叫びながら手を放してしまい、手から剣が落ちる。

それを見逃す愛梨ではない。

落ちていく剣に向かって跳んだことで見事に剣を手に入れた。そして一瞬のうちに30もの魔物が絶命するのだった。

その光景はもはや殲滅に近い。

魔物どもを殲滅していき、どんどん死骸が増えていく。

その上愛梨は息1つを切らしていない

しかし、新たに闘牛らしきものを切ったところで剣を手放すことになってしまった。

目の前を炎が駆け抜け、剣を溶かしてしまったのだ。

愛梨はすんでのところでかわしたため被害はなかったけれども、

その射線上にいた敵は消えてしまったのだった。

炎を出した相手の正体はすぐにわかった。

2 赴く先は死地（後書き）

うーん…

SAOみたいにバトルシーンとかが書けたらいいなあ

3 必ずしも人が助けしてくれるとは限らない

「はあ」

綾音は溜め息をつく。

「綾つてば溜め息多すぎだから」

綾音の隣を歩くポニーテールの子が言う。

彼女は綾音という霞んでしまうが、まあ神立コンビがおかしいだけなのだが、2人がいなければトップにも入る可愛いさだろう。

愛梨より少し背が高いくらいの身長で、愛梨と同じように面倒見のよいお姉さんといった印象だ。

でるところがでていて、それを見るたびに綾音が愚痴る。

だが、今の綾音はそれどころではなかった。

「だつてえ」

愛梨が一緒じゃないんだよ？という副声音の入りの綾音の台詞である。

「そんなにあたしらと一緒にが嫌か。確かにあたしらじゃアイツの代わりは出来ないもんな」

「…違つて、全然嫌じゃないって！時雨しぐれといるのは楽しいよ？」

「じゃあ僕は論外、話にすらならないってことだね？」

「違うもん！^{みぞれ}霰もちゃんと好きだから！」

霰と呼ばれたのは時雨の隣、愛梨の隣の隣ということだが、ロングストレートな髪型をした子のことだ。

中性的な子で、背も175？もあるためか男にも女にも見えてしまう。

一応女の子だ。だけど知っていてもなお見間違えてしまう。

綾音はいつも、宝塚でやっていけそうな子だ、と思ってしまう。

真偽は不明だけど話しによると、何度かそっち系でいかないかと声を掛けられているとか…。

「ふふ、ありがとうね。でも、一番好きなのは愛梨さんでしょ？」

「もちろん！」

霰のセリフに綾音は間髪を入れずに、ツインテールが浮かんでいるかのように可憐に振り返りながら答えた。その様子は幻想的であった、が。

「そ…即答かよ！？」

綾音が百合かもしれないということを既に知っているにも関わらず、驚いたそぶりで時雨が言う。

「即答よ？」

さも当たり前のような綾音の返事。

「さすが本妻と言われるだけはあるな」

綾音が一部で呼ばれている名だ。（主にファンクラブの方々）

「失礼ね！私の名前は綾音だよ！」

「百合音の方がお似合いだ」

「百合を馬鹿にしないで！百合がかわいそうじゃない！全国の百合に謝りなさい！」

「……どっちの意味かな？」

名前に百合の付く人という意味か、そっちの「百合」の人という意味か、ということである。

「どっち……名前の方に決まってるよ！」

「あはは、綾音ちゃん、既に認めてるよ〜！」

霰が笑い、時雨が諦めた顔で言う。

「負けたよ……もう煮るなりなんなり好きにしてくれ」

「じゃあ、時雨の名前が百……」

「それは勘弁！」

影からこっそり見ていた愛梨亜種の一人は言うのだった。

「…見つかったら……死…」

もし綾音に見つかったならば、容姿がそっくりなわけだから百合の対象になること間違い無しであり、絶対にバレないように隠れな
いと…、ということである。

そのときつい、バレた時の事を考えてしまい、

「勘弁……」

と呟くのだった。

「…それは勘弁！」

また炎が飛んでくる。しかも複数。

「物語の序盤で遠距離攻撃はないって…！」

炎が飛んできた後に続いて、雷や水の弾、風の刃が嵐のように飛
んでくる。

飛ばしてきた相手は色のついたスライム群というよりゼリー状の
集団に、複数のゴースト、ゴブリンの上位種と思しき赤いゴブリン
達。

そして圧巻なのが、

「竜ですか…。てつきり様子見だけだと思ってたのに」

黒い竜である。オークの5倍くらいの大きさで、一番強力なものを撃ってくる。中でも黒い弾は威力がヤバそうだった。

戦況は、愛梨がその他多数が撃ってくるものは避けたり相殺してなんとかかわすのだが、黒い竜の放つのは速度が周りより格段と早く、いつ当たってもおかしくない状況であった。

すると、炎と水弾と雷が相殺しようとしてるところに黒い竜が黒い弾を撃ってきた。

その炎は雑魚の放つものを飲み込み、隙の出来た愛梨に向かう。ちよ…これは無理、と思ったのと同時に黒い弾を喰らってしまったのだった。

直後、黒い竜以外の敵すべてが音もなく消え失せる。

愛梨は倒れてはいなかった。ただ、その場に立ち尽くしていた。身体中あちこち傷ついてボロボロだし、学校の制服もボロボロだった。

生きているのが奇跡であろう。

そんな愛梨は目を虚ろにしながら、何とか必死の思いでよたよた歩き、何かを手に抱き抱えて倒れてしまった。

手の中にいたのは、小さな黒い竜だった。

さっきの黒い竜がまるで時間を巻き戻したかのように子供になっていたのだった。

小さな子供の黒い竜は愛梨の手の中ですよすや眠っていた。

そこは悪夢だった。どこもかしこも燃えている。

空は赤く、黒い雲がこの世ではないことを連想させてしまう。

剣や盾などの武器も転がっているが、すべて壊されている。

生きている人はおらず、地獄の真ん中にいるのはただの人外だけだった。

死体の山の上にいるのだった。

右手には大鎌、左手には剣を持ちたたずんでいる。

その顔は笑っていた。

瞳は血を吸ったかのように赤い。

髪も血で真っ赤になっている。

着ているローブのようなものも深紅に染まる。

笑う。

笑う。

ただ笑っただけだった。

どれだけ笑っていたのだろうか。考えることもない。

笑い声は止み、燃える音だけが世界に聞こえる音だった。

そして、世界はガラスのように砕け散り、消えた。

人外を残して。

その目は、泣いていた――

見たくもない、見ることもないと思っていた夢を見た。
目を覚ますと、身体中汗だらけだった。

「ここは…?」

だけどそれよりも、ベッドで寝ていること、知らない場所にいるのに疑問を持つ。

攻撃を浴びて、倒れたのではなかったのか?と愛梨は思う。

そして、倒れる時、手に何かいたような――と気づいて身体を起こす。

「あの小さな黒い竜は!？」

手には何もない。まさか…!と愛梨が考えたとき、

ペロッ

何かに頬を舐められる。

「良かった…！」

頬を舐めたのはその黒い竜だった。

まるで自分の親がやっと起きて喜んでいようだ。

「まるで、じゃなく私が親…か」

あの時あそこにいたのは愛梨とこの小さな黒い竜のみ。

それは不覚にも愛梨が自動迎撃オートカウンターを発動させてしまったためだった。そしてその影響であの小さな黒い竜も子供にまで戻ってしまったのだ。

だから子供のあの竜からしたら目の前の私が親だと思ったのだろう。

自動迎撃オートカウンターの手加減出来たから良かったものの、もう少しで消してしまうところだった、と反省する。

「…名前、決めよっか」

頭を撫でてあげながら言う。

「ぎゃう」

愛梨の言葉に反応する。

…竜というのは知性が高いのだろうか、と考える。

これが噂のご都合主義とか…などとは決して考えてない、はずだ。愛梨は竜の知性について考えるのを止め、名前をどうするか考える。

「うん…。そもそもあんた、男？女？どっち？」

「ぎゃう」

…わかんないよ、と言うと、

「男じゃよ、男」

一人の老人が部屋に入ってきて言う。

「誰？」

愛梨はとつさに警戒する。

「村人その1ってこじゃな」

「…そうですか」

「それが助けてくれた相手に対する態度か？何か言うことがあるだろうに」

「…助けてくださりありがとうございます」

愛梨は警戒心を緩めず、老人を睨み付ける。

「…そんなに睨まないでくれ」

「これが元々の目つきなのですからねど？」

この老人はおかしい、と愛梨は思う。

この老人の纏う空気は戦っていた魔物たちのそれを凝縮したようなものだ。

コイツは絶対に人ではない、と愛梨は思った。

これが人間なら驚きだろう。

「ほう…分かるか。人に化けるこの魔法を見分けるとはなかなかやるではないか」

老人は愛梨の視線から自分の魔法がバレているのに気づいた。

この老人によると、使っていたのは肉体変化魔法らしい。

しかも構造体そのものを偽装、変化させる魔法を見破る存在など世界には数えるほどしかないというが、気配や精神までは変えられないのだろう、纏う空気が違ったため、愛梨でも即座に見破れたのだ。

「ほめ言葉として受け取らせていただきますね？」

「フオッフオッフオ。面白い人じゃ！ワシの名はストラトス。魔王としてこの世に君臨しておる」

…やっぱりか、と愛梨は思った。

「…あんなところで倒れて、運良く出会う人なんてあなたみたいな人だけなものね？」

「魔王城からのワシの殺した気配も分かっておったか！これはなかなかいい拾いものじゃのう！」

フォツフォツフォ、と老人もとい魔王ストラトスは言う。
あれで殺していたの？と愛梨は啞然とした。事実、ガンガン伝わ
ってきていた。

「その上、ブラックドラゴンまで手懐けているのならなおさら、じ
やな。…よし、魔王たるワシ自ら名前を付けてやろう。ブラックド
ラゴンだから……ブラックで！」

「ぎゃーっ」

…まさか、嫌なのか？ワシが付けた名前が…、と魔王は拒絶され
た。

ブラックドラゴンがそっぽを向いたからだった。

「和訳して『クロ』でいいわよね」

犬につける名前のような感じが、ブラックドラゴンは大層喜んで
いた。

「よろしくね、クロ？」

「ぎゃうー」

ブラックドラゴンの子供の名前はクロに決まったのだった。

「ば…馬鹿な…」

地面に手をつく魔王がそこにはいたのだった。

閑話休題。

話は戻って、本題に入る。

「しかし、よくまあ魔王が人を助けましたね？」

「仕方ないではないか。普段なら有り得ない、交わる事もない「神様」とやらからの頼みごとらしいからの。それに老後の楽しみだと思っただけじゃ」

愛梨が魔王と言葉が通じたりするのも神様とやらの恩恵なのだった。

仕事に支障をきたさないようにというお節介である。

しかし、愛梨はそのことまでは知らなかった。

「で、お主は何者じゃ？」

「…仲間と来てたら魔物？モンスター？の大群に襲われまして…ク口はそのときに…ってことでお願い出来ませんか？」

「曰く付きか！いいじやろっ」

私は商品か！と愛梨は心で突っ込むのだった。

「なんせ、ワシも随分退屈しておったからの」

ついでに世話してあげる、という訳である。

これも神様とやらの頼みごとのうちのなのだろう、と愛梨は思ったが素直に受け入れることにした。

「袖振り合うも多生の縁ってやつよね？…袖が触れ合うのはこれかなのだけでも」

そこから魔王城に一週間ほど滞在させてもらった。

…言うておくが、決して愛梨は綾音のことなど忘れていないわけではない。

この世界と現実世界は時間……がずれているからだ。

愛梨はそのことをちゃんと知っていたから、一週間もいたのだった。

あっちの世界ではやっと一日が終わったところだった。

……最後の方は綾音のことを覚えているか、怪しかった。

クロのことで愛梨は頭がいっぱいだったのだった。

4 魔王の役目、愛梨達の役目、兵士の役目

「一週間ありがとう、ストラトス」

「ぎゃう」

愛梨とクロは感謝を述べる。

これから愛梨とクロは共に旅立つのだ。

それはストラトスのとこに長い間滞在するのも無礼だし（ストラトス寧ろいてほしいようだったが）、現実世界のこと、綾音のことを含めてのんびりするわけにもいかなかった、という理由もある。

「魔王に挨拶なんかせんでもいいのじゃぞ？」

「偏見でものを言うのはよくないと私は思うのよ。クロみたいに、ね？」

ストラトスは今でこそ爺の姿をしているが、本来の姿はもっと大きくだいたい奈良の大仏並みにデカいらしい。私達に合わせるために姿を変えてくれたのだった。

魔王、と聞くと極悪人で人間を滅ぼし、魔物で世界征服を目論むような印象がどうしても強い。

しかしこの世界だと文字通り「魔物の王」ということらしい。

愛梨のストラトスへの印象は「強すぎるお爺さん」というイメージだったからどうしても魔王というのに抵抗を感じていたのだ。しかも意外と優しい。

ストラトス曰わく、

「人との均衡を保つのが魔王の役目での。無理に人間に手を出すとその種族が滅びかねんのじゃよ。数は有れども頭がなきゃ話にならん。…ワシ等などより人間の方がずっと魔物じゃよ」

とのこと。魔物はどうしても相対的に人間より知性が劣ってしまうからこうして魔王を立てることで種の保存に力を注いでいるのだという。

そのためにかれこれ五百年ほど魔王をしてるとか。

新たに魔王が出ないのは「人間なんかに負ける訳がない」という思いが魔物の根底にあり、聡い奴は人との関わりが嫌ということ。魔王には出来ないし、なりたがらないのだった。

ということ、愛梨はそれなりにストラトスへ好意を抱いていたのだった。（尊敬する人として）

だから愛梨はストラトスにちゃんとした礼儀も行うのだった。

そしてクロことブラックドラゴンは基本的に人が大嫌いであり、見つけたら即座に攻撃するらしい。

そこから気性が荒いなどと誤解を受けている。

昔ブラックドラゴンは人間に裏切られ、大量の仲間が死んだ。その日からブラックドラゴン達は人間のことは信用しなくなり、殺されたくないから殺される前に殺し始めたのだとストラトスは言う。であるからして、人間に懐くクロは初めてのケースなのだ。そういった背景を含め、偏見は良くないと言ったのだった。

「餞別じゃ、これを持ってけ」

ストラトスが愛梨に何かを投げる。

それは杖だった。しかし杖にしてはちょっと長い気がする。

「ストラトス、これは何よ？」

「宝杖＞道化の冠《クラウン・クラウン》くじゃ。随分昔の時に人が使っていた杖と剣の複合武器での、見た目からは分からんが中には剣が含まれていて便利な代物じゃよ。既に所有者は愛梨じゃから安心じゃ」

「嬉しいけども、またなんと名前が中二なのかしら…。名は体を表すのだから仕方ないけどもね…」

愛梨は呟く。ストラトスは中二という言葉が分からなかったらしく、特に何も言っていなかった。

そしてストラトスは用意を終えたのか、別れの挨拶をする。

「それでは愛梨、クロ元気だな。何時でも遊びに来て良いからの！」

「じゃあね！ストラトスも元気だね！くれぐれも勇者に倒されないようにね！」

「ぎゃうぎゃう！」

そうしてストラトスの用意した転移魔法陣にて愛梨とクロは旅立つのだった。

「さて、これからどうなるのか楽しみじゃな…」

「着いた！」

「ぎゃう」

ストラトスに送って貰った場所から徒歩5分。

目的地であるユグド村に着く。

この村は歴史上始まりの地とされ、世界の誕生もユグドの地だと言われている。

そして魔王に立ち向かった勇者の半分がこの村出身らしい。

しかし、その割に村自体は大したことはなく、唯一「勇気の祠（ゆうきのほくら）」と呼ばれる祠がひっそりと静かに構えているだけであった。

愛梨はこの村に勇者を探しに来たのだ。

始まり、というフレーズに惹かれたのも否めないが、勇者を見つけるためにこの地がピッタリであったのが最大の理由である。

愛梨と愛梨の頭の上に座るクロは、村で一番大きな家である村長の家へ行こうとする。

と、やはり、であるけれども村の住人達からの注目を浴びる。

気にしてたらキリがないので愛梨とクロはさっさと村長の家へと向かう。

「すみません」

家の扉が開いていたのでそのままは入り言う。

「どうしたのかしら？…と知らない子ね、旅人かしら？それとも冒険者？」

こつちを振り向いた女性が言う。

「…私達は旅人ですね。どうも初めまして、私はアイリ、頭のこの子はクロといいます。用事でしばらくの間ユグド村に滞在しようと思ひまして、その旨を伝えに来ました」

「私はユグド村の村長でミレイよ。よろしくね、アイリ、クロ。あら、その子は…」

頭のクロのことだろう。やっぱり分かっちゃいます？と聞くと

「珍しい訪問者と思っていたけれど、本当に珍しい訪問者だわ。まさかブラックドラゴン連れだなんて夢にも思わないわよ！」

これには事情があることを伝えると

「ま、とりあえず歓迎するわ。アナタ達はどこに泊まるのかしら？」

「…お金を無くしてしまひまして、どうにか出来ないものか、ここへ来たのが本当の理由です。」

そう、愛梨はお金を全く持っていなかった。

ユグド村まで歩いている途中、お金を持っていないことに気付いたのだった。

クロもやべー忘れてた、と言わんばかりに手で顔を覆っていた。

「いいわ、私の家に来なさい。今ちようど部屋が一つ空いているのよ。ただし、タダではないからね」

とりあえず宿泊先は問題が無くてよさそうだ、とアイリは思った。

「ありがとうございます！タダだとは思っていませんからよろしく
お願いします」

「ぎゃう」

愛梨はクロと一緒にミレイへ感謝をする。

その日、ミレイに村のことを教えてもらい、住人達のことなども
教えてもらった。

別に住人のことまで教えてもらう必要は無かったのだが、村長の
家の周りには沢山の住人ほぼ全員がいたため、ついでに教えてもら
ったのだ。

帽子とかでもかぶってくれば良かった、と後悔する愛梨だった。

今日は村長の家から出られないと分かった愛梨はクロの相手をし
て一日を過ごしていたのだが、住人達は歓迎パーティーを開いてく
れるらしく、愛梨は出ないわけには行かない状況に晒された。

きつと村人達は私を見るために計画したんだろうなあ、と愛梨は
思ったのだった。

実は愛梨の言うとおりであり、その日、村人達は愛梨が家から出
てこないのに気付き、どうすればいいのか全員で考えていた。

すると「歓迎会を開けばいいじゃない」とミレイ村長が言ったこ
とで村人達の心に火がつき、パーティーになったのだ。

愛梨がミレイを恨むと、

「これも仕事だから」

と言って愛梨は何も言えなくなるのだった。

パーティーで死ぬとか、洒落にならないんですけど……、と愚痴を聞いてくれるのはクロだけだった。

何故なら住人達からの質問責めに踊りの誘い、愛梨の取り合いっこ、ナンパなどがあつたからだ。

特に辛かったのは、愛梨のちょっとした行動や一言で問題が起きることだった。

何があつたかご想像にお任せします。

そしてクロも物珍しさから愛梨と同じ目にあつたからだった。

…一週間経つてやっと落ち着いたとか。

そして、言わずもがな梨とクロは村のアイドルとなるのだった。

…期間限定ですけどね、と愛梨はクロに言うのだった。

こっちでも新たにアイドルが出来ていた。

「…神崎実梨^{みのじ}、よろしく…」

「こっちもよろしくね！あ、綾音って名前だけど、綾でいいから！
目を輝かせた綾音の言葉。

「このアホはほつといて、私は時雨だ。よろしく」

「僕は霰だよ、よろしくね。さっきは凄かったね」

時雨と霰が言う。

今、綾音達は学校からの帰り道だった。
しかし、いつもなら一緒に愛梨のポジションには、別の愛梨がいた。

正確に言えば、愛梨亜種の一人で髪が深緑色に赤い眼鏡の愛梨亜種だった。

「愛梨の双子の妹なんてね、初めて聞いたわ」

「しゝかゝそ、愛梨は本家に戻って、しばらく学校には来れないなんて」

時雨と霰が言う。

愛梨亜種達は本体の不在をどうしようか話し合った結果、本家に呼び戻された、ということにしたのだった。これを決めるのに随分時間がかかったのだった。

「しゝかゝそってなんだよ」

「よく言ってくれましたな時雨ちゃん。しかし、としかもを合わ

せた僕が考えた言葉さ」

しかしにも、しかもにも聞こえない？と言った霧。
ところが、綾音は不機嫌になっていた。

愛梨のことを思い出したのだ。

「愛梨が約束をまた破った…」

愛梨亜種の実梨は姉の代わりに言う。

「…姉は物凄く申し訳なさそうだった…。しかも、本家からの呼び出しなので仕方ないこと…」

「実梨ちゃんさがさっそく使ってくれた」

霧が物凄く喜んでいる。
その光景を見て綾音は、

「ふふ、愛梨に似てるわね。実梨ちゃん、ありがとつ。私を元気付けようとしてくれて嬉しいよ！」

「…どういたしまして……綾音…」

「んもう！綾でいいよ！」

「…綾……音…」

「……さすが愛梨の血を引く双子だな。恐ろしいくらいだ」

「んふふ、綾音の扱い方を知ってるね。愛梨ちゃんもいたら、

面白んだろうな」

時雨と隼は肝心な部分は一緒に愛梨っぽさを感じる。

「…神崎家はあたしをあだ名で呼んじゃいけない規則でもあんのかな？」

ショックそうに見えて、嬉しく思う綾音だった。

ことの始まりは遡ること八時間と三十分前。
伝説となった「実梨ショック」は起きた。

その日は学校中に衝撃が走った。
新しい転校生が来たという。

しかも美人らしい、ということとそれなりに男子が盛り上がっていた。

女子は男ではなく女が来ると聞いていたからいつものテンションでいた。

しかし、一人の女子が教室に入ったとたん、顔を真っ赤にして倒れてしまったのだ。

「おい、どうした！？何があった！？」

と男子の声。

「ひ…ひな！大丈夫！？」

と倒れた女子の友達。そして近づいて安否を確認しようとしたところで気づく。

廊下に男子、女子が無数に倒れているではないか。
全員幸せそうな顔をしていた。

「ひっ…！」

それにつられてクラスの連中も廊下を見て驚く。

「て…転校生は……かん…だ…ち……ガクッ」

「ひな？…ひな！……ひいなあああああああ！！！」

教室で倒れながら、その生徒は最後の言葉を紡いだ。その顔は幸せそうだったと友達はいう。

転校生は神立コンビ並みに可愛い、と言いたかったのだろうとクラスの連中は思い決死の覚悟（散っていった仲間のために）を決め、転校生のいる教室へ向かった。
すると、

「隊長！偵察部隊がやられました！」

「馬鹿なっ！？あやひゝがやられただど！？基本的に神立コンビレベルではないと反応しない、あのあやひゝがか！？」

「た…隊長！神崎愛梨ファンクラブの会長までもやられているとの

報告が！」

「なん…だと…！？愛梨ファンクラブ会長は愛梨様だけに全てを注いでいたハズ…！あやつは綾音様にも反応せんかった強者だぞ！」

「既に愛梨ファンクラブは全滅しております……………！」

クラス全体という名の部隊全員が言葉を詰まらせる。女子なんかは戦々恐々としている。

そこにまたクラスメートがやってくる。

「隊長…！」

「どうした！？」

「恐れながら申し上げます。今日は……………全校集会だそうです……………」

「「ぜ…全校集会…だと！？」」

全員がハモる。

みんなもう終わった…、という顔をしている。

隊長は言っ。

「クソっ、上層部の連中は何を考えている！？我々に（萌え）死に行けというのか…！こうしている今も、兵士達はどんどんやられてしまっているというのに…！！」

上層部とは教師達のことである。

一週間に一度の全校集会なのはいつものことである。日にちは全

くずれていない。

伝令！と（萌え）死にそうになりながらまた一人やってくる。

「さ…最終防衛ラインが突破されました！」

全校集会の行われる体育館は転校生の方が遠い所にあるため、転校生はクラスの前を通らねばならなかった。

しかし、その報告は既に遅かった。

「各員、衝撃に備え……ゆ…ユニバアアアアアアスー！」

クラスは全滅してしまった。特に眼鏡を掛けていた隊長は、眼鏡がぶっ壊れていた。

でも、いい顔をしていたのだった。まるで本望だと言わんばかりに…。

…どんな衝撃…だよ…、と実梨は呟くのであった。

その日、あまりにも多くの生徒が保健室送りとなったため、全校集会は中止となった。

前代未聞だというのは当たり前か。

その後、なんとか一日が過ぎ去り、実梨は綾音達を誘い一緒に変帰るのであった。

話は元に戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2858ba/>

彼女は「終わりの始まり」

2012年1月8日19時52分発行